

## 2015日中韓会長会議ならびに国際シンポジウム報告

副会長・国際学術交流促進委員会委員長 黒木 保博（同志社大学）

2015年10月23日・24日に韓国忠清北道五松(オソン)市にある韓国保健福祉人力開発院会議場にて2015年韓国社会福祉学会秋季学術大会が開催されました。日本社会福祉学会からは岩田会長、蘇国際委員、日中韓国際シンポジウム・シンポジストとして石河会員（日本福祉大学）、加山会員（東洋大学）そして黒木（副会長&国際学術交流促進委員会委員長）の5名が参加しました。大会会場はソウル駅から高速鉄道にて約45分の五松市にありました。

前日22日夜には韓国社会福祉学会尹会長、朴次期会長、朴アジア委員会委員長、中国4名、日本5名が出席して歓迎夕食会が開催されました。

23日午前中に日中韓会長会議が開催されました。出席者は日本から岩田会長、蘇委員、黒木の3名、中国からはPan副会長と他3名、韓国が尹会長、朴次期会長、朴委員長でした。この会議では「今後の日中韓研究交流」について話し合いました。日本と韓国は長年、覚書に基づく学術交流をしてきています。しかし、日本、韓国ともに中国との学術交流覚書の協定締結はまだありません。このような状況下で3か国の学術交流をどのように進めていくかが検討課題になっています。尹会長からは、第1案は、日韓覚書通りに隔年ごとの開催をしながら、それぞれの学会が中国を招聘していく方式を取っていくのか、それとも第2案としては中国も含めた3か国覚書を締結した学術交流にしていくのか、という2つの提案がありました。日本と韓国は覚書により国際シンポジウムをそれぞれの学会が隔年開催することになっています。2015年は韓国、2016年は日本、2017年韓国で開催することになっています。しかし、第2案で、日中韓の学術交流覚書が成立すれば、3年毎に各学会開催案が実現することになります。

中国では中国政府が学会設立の認可権をもっており、現時点では認可された中国社会学会所属の社会福祉研究専門委員会として活動していること、諸事情から会員組織ではないこと、つまり、会費納入による運営ではないという状況がPan副会長から報告がありました。しかし、このような組織であるが、日中韓学術交流はまったく問題はないし、各国の持ち回りで3年に一度開催することには問題ないとの見解表明がありました。岩田会長、尹会長からも、3年毎に各国開催方式は実現可能との意見表明がありました。

以上のような意見交換から、結論として、第2案の3か国覚書締結をめざすことが確認されました。また3か国持ち回り方式の国際シンポジウムについても、Pan副会長からは中国に持ち帰って議論したいとの意見表明がありました。日本としては、中国の回答を待ちながら、現状の日韓学術交流覚書による国際シンポジウム開催の場に中国を招聘した形での日中韓学術交流を促進していくこととなります。

この話し合いの中で、岩田会長から、日本社会福祉学会理事会では国際シンポジウムを各国持ち回り方式で3年毎開催する方向ですでに考えていたこと、しかし、3年前の理事会議論ではこの方向が一時消えたこと、その理由は、中国の大会に日本が招待されなかったからであること、今後の学術交流のあり方として、ぜひとも政治レベルとは切り離れた学術交流を切望したいとの意見表明がありました。Pan副会長からは今後はこのようなことがないように学術交流を促進していきたいとの回答がありました。

なお、24日午前中は、「移住と社会福祉」(Migration and social welfare)をテーマにした日中韓学会の国際シンポジウムが開催されました。今回は同時通訳をつかって5人の発表が行われました。持ち時間をすべて発表できることから、発表内容も深いものになったと思われました。

日本からは加山弾会員（東洋大学）が「日本の地域におけるソーシャル・エクスクルージョン ーア

イデンティティに関わる排除をめぐって」、石河久美子会員（日本福祉大学）が「日本における多文化ソーシャルワーク ―理論と実践の課題―」を発表しました。中国からは熊貴彬氏（中国青年政治学院）が「陽光中途の家：社区矯正の北京モデル福祉サービスの分析 ―北京市朝陽区にある陽光中途の家の調査に基づいて―」、韓中廸氏（復旦大学）による「農民工の福祉意識及びその影響要因に関する研究―北京市における農民工の調査を事例として―」の発表がありました。さらに韓国からは、キム・ヨンス氏（白石大学）「結婚移住者・支援者のための韓国の社会福祉サービス分析および発展方策」の発表が行われました。それぞれの発表後に、事前に決定している指定質問者からのコメントや質問があり、発表者が回答するという形式で行われました。

ディスカッションの中で、「移住」をめぐり相違が明らかになってきました。わが国や韓国の場合、移住とはある国から他国に生活基盤を変えていくというイメージがあります。しかし、中国では仕事を求めて農村部から都市部へ移動する意味となるとのことでした。

過去に幾度か国際シンポジウムを経験している私としては、各国の発表内容に共通点がみられるようになってきたという印象でした。つまり、かみあう議論ができるようになってきたとの感想です。しかし、学会の自由研究発表が行われた建物とこの国際シンポジウム会場が離れていたことから、参加者が少なかったのが残念でした。